

江戸時代前期の色絵磁器「古九谷」の意匠について —「色絵丸文散らし波形皿」(出光美術館)を中心に—

学習院大学
川合加容子

17世紀中期に肥前・有田で中国から色絵磁器の技術が伝わり、日本で最初の色絵磁器が作られた。それら肥前における最初期の色絵は、これまで加賀産の「古九谷」と想定されてきたが、平成26～28年に行われた有田・山辺田窯上絵窯跡の考古学的調査で多数の色絵陶片が出土し、今日「古九谷」と呼ばれる色絵磁器の多くが肥前窯で作られたことがほぼ明らかとなった。

一方、「古九谷」の美術史的な研究では、これまで上絵による多彩色の「五彩手」、緑彩と黄彩の二色の上絵を中心に器面を塗り埋める「青手」など、主に大皿を中心に研究が進められてきたものの、例えば色絵と染付を併用したいわゆる染錦文様を構成する「祥瑞手」などは、色彩が比較的限られ、大きさも鉢や向付などやや小ぶりのものが多いためか、等閑視されてきた感がある。そこで、発表者はこの染錦様式の「祥瑞手」に着目し、近年作品調査を行ってきた。それによって、17世紀後期以降の肥前磁器の色絵には、上絵のみの「五彩手」や「青手」よりも、むしろ染錦様式の「祥瑞手」の方がより強い影響力をもち、のちの「鍋島様式」や「金襴手様式」が誕生するいわば母胎となった過程が明らかになってきた。本発表は、その様々な新知見をもとに、肥前陶磁史における「祥瑞手」の位置付けの再考を提案するものである。

17世紀中期の「祥瑞手」の作品群の中でも、発表では「色絵丸文散らし波形皿」(出光美術館)に、とくにスポットを当ててみたい。本作品は、中国・明代末期の景德鎮窯の磁器(祥瑞)の影響を受け、肥前窯の当時最先端の技術で成形されている。一方で、同時代の「五彩手」や「青手」の大皿と比較してみると、中国などの異国趣味的な意匠とは別の、伝統的な和様の美意識が認められる。大きく歪められたかたちは、桃山時代の陶器の伝統を継承するようにも見え、また、その州浜形とも波形とも解される器の表面には、染付と色絵で松竹梅や、波など水辺のモチーフが描かれている。この意匠は、江戸時代前期の風俗画に描かれた宴会風景に登場する島台(州浜台)を想起させ、祝祭の場を飾る「風流」の要素をも備えた器であったと判断されよう。さらに内面に散らされた丸文は、その中に山水など様々な意匠が描き込まれている。このような丸文散らしの意匠は、17世紀初期から中期の染織や漆工品(蒔絵)にもしばしば認めることができ、当時の工芸のなかに顕著にみられる時代意匠であったと考えられる。

また、本作に類する「祥瑞手」の作品は、近年江戸城本丸周辺の明暦三年(1657)の大火にかかわる遺構から出土しており、徳川将軍家が使用したものと考えられている。すなわち、本作は江戸時代前期における祝祭性の造形化の特質を示す最上級の器であると言える。